

| | |
|-----------|--|
| 氏 名 | 潮 村 公 弘 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 学 位 記 番 号 | 乙第6号 |
| 学位授与の日付 | 2014年9月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 学位論文題目 | 社会的カテゴリーに基づくステレオタイプの認知機構の解明 情報処理特性論から社会的動機論への展開 |
| 論文審査委員 | 主 査 教 授 諸 橋 泰 樹 副 査 教 授 齋 藤 孝 滋 副 査 東洋大学教授 安 藤 清 志 |

論文内容の要旨

本研究は、第一部において社会的ステレオタイプについての概説を行った。第二部においては、「情報処理特性論からのステレオタイプの認知研究」について取り組み、入力情報の質にかかわる要因の影響について検討を行った。また第三部では、「社会的動機論（ここでは社会的アイデンティティ論）に依拠したステレオタイプの認知研究」について取り組んだ。第二部と第三部あわせて実証研究 1 ～ の 7 つの実証研究を通じて、入力情報の質にかかわる要因の影響についての検討と、自身がおかれた社会的な状況要因の影響についての検討という 2 つの枠組みを通して、カテゴリー化処理について検討した。そのさい、対人記憶過程と印象評定過程におけるステレオタイプの認知の関係性について検討を進めた。また、印象評定過程については、背反する 3 つの対立仮説（対立理論）が並存している点に着目し、これらの 3 つの仮説が、状況要因に依存して支持される仮説（理論）が異なることを明らかにし、3 つの仮説（理論）が並立しうることを実証した。さらに、対人記憶過程での強調化効果（accentuation effect）を減じうることを実証するとともに、対人記憶過程での効果と印象評定過程での効果が、公的表明性の高い状況下においては、特定のステレオタイプ次元では、カテゴリー化に基づく強調化効果が強いほど反ステレオタイプの評価がなされており、「創られた性ステレオタイプの評価」と呼ぶべき現象が認められた。最後に終章部において、本研究のまとめと今後の展望について論じた。

個々の実証研究については、〔実証研究 1〕では、対人記憶課題を対象として、カテゴリー化処理に関して強調化効果が生起しているかどうかという点から確認をするための追証的研究（この点についての研究報告は本邦では見当たらなかった）が実施された。なお、そのさい先行研究に比して、発言内容の性度を事前に測定して統制をすることにより、より厳密な実験研究を遂行した。その結果、性別カテゴリーに基づく強調化効果が確認され、性別に基づくカテゴリー化が生じていることが示された。なお熟知性（familiarity）に関する応用的な仮説は支持されず、事物知覚のさいの原理が単純には応用できないこともあわせて示された。

〔実証研究 2〕では、対象人物に関するカテゴリー属性と個別情報が競合する実験状況を設定し、カテゴリー属性が対人記憶と印象評定において、支配的な影響を有しているかどうかについて検討した。具体的には、ディスカッション場面に登場する話し手に関して、「話し手の性別」と「発言内容の性度(男性的発言/女性的発言)」とを競合させた。結果は、対人記憶課題においては、話し手の性別によるカテゴリー化が引き起こされていた一方で、発言内容の性度に基づくカテゴリー化は引き起こされていなかった。印象評定課題においては、話し手の性別と発言内容の性度とが交互作用効果的に機能していた。ただしその交互作用効果の形態は、複雑でシンプルな説明が困難なものであった。この印象評定課題の

結果より、社会的動機論に依拠したステレオタイプの認知研究の必要性が喚起された。

〔実証研究 〕では、実証研究 においては音声刺激と顔写真刺激を用いて刺激呈示を行っていた設定を、OHPを用いた文字情報のみによる呈示とした。この操作は、話し手の声の質や抑揚などのパラ言語的特質ならびに顔写真による視覚的情報が失われることにより、話し手の性別に関する情報を最大限に低減させた状況を構成し、話し手の性別に関する情報として「男性」「女性」という文字による属性情報のみを呈示した。結果は、対人記憶課題においては、男性・女性という社会的属性要素によってカテゴリー化が生じていることが示された。また印象評定課題においては、個別情報に基づく印象評定がなされたことが示された。

〔実証研究 〕では、単なる弁別のための属性要素によってもカテゴリー化が生じるのかどうかを確認するために、対人記憶課題のみを検討対象として、男性・女性という性別に関する属性要素と、記号情報（単なる記号としての情報）にすぎないA、Bという識別のための属性要素とが、話し手に対する情報として呈示された。結果は、性別情報に基づくカテゴリー化が、実証研究 ー の一連の研究と同様に引き起こされていた一方で、記号情報（単なる記号としての情報）に基づくカテゴリー化は生じていなかった。このことから、対象人物に関する属性要素の中でも、意味のある社会的属性に基づいてカテゴリー化が生起していることが確認された。

〔実証研究 〕では、ディスカッション場面を視聴するさいの「実験参加者の性別構成要因(マジョリティ条件/マイノリティ条件の2条件)」と「意見の公的表明性要因(高・公的表明条件/低・公的表明条件の2条件)」をともに取り上げた。印象評定課題の結果は、自己ステレオタイプ化を測度として、男性性次元、女性性次元のいずれにおいても、社会的アイデンティティ仮説を支持する結果を得た。すなわち男性実験参加者・女性実験参加者ともに、自身がマイノリティ状況にある条件に比べて、自身がマジョリティ状況にある条件において、男性性次元において高くまた女性性次元において低く自身を認識していたことが示された。

〔実証研究 〕では、実験課題に対する実験参加者の関与を高めるために、実験参加者がディスカッションを行う課題を設定した。その結果、自身がマジョリティ状況におかれた場合は、高・公的表明条件下では、伝統的な性ステレオタイプを抑制・回避して、反ステレオタイプの評価が自身に対してなされていた。その一方、低・公的表明条件下では伝統的な性ステレオタイプに沿った、すなわち性ステレオタイプに合致した評価が自身に対してなされていた。なお、自身がマイノリティ状況下にある場合には、公的表明性要因の影響を受けなかった。実証研究 ー、実証研究 ーを通じて、社会的な状況要因に応じて、3つの対立仮説それぞれが支持をされる状況が異なっていること、すなわち社会的状況の相違という要素を取り入れることで3つの対立仮説が統合できることを示した。

〔実証研究 〕では、「交差カテゴリー化」を取り上げ、性別に基づく対人記憶過程で

のカテゴリー化効果の低減を実証することと、対人記憶過程でのカテゴリー化効果と印象
評定過程でのステレオタイプの評定の直接的な関連性を条件分岐的に析出することを目的
とした。結果は、話し手の性別に基づく強調化効果は生じてはいたもののその指標値は 1.71
であり、これまでの一連の研究に比して低い値を示した。また、カテゴリー化処理におけ
る強調化効果の程度と、話し手へのステレオタイプの評定との関連性について相関分析を
行った結果、実験参加者全体を対象とした場合は、2つの指標間の相関関係は無相関であっ
た。続いて、実験参加者の性別要因と公的表明性要因を用いて実験参加者を4群に分割し、
群ごとに相関関係について検討した。その結果、女性性ポジティブ次元においては、男性
参加者・公的表明条件と、女性参加者・公的表明条件において、両指標間に負の相関関係
を示した。公的表明条件下において得られたこの知見は、「創られた性ステレオタイプの
評定」と呼ぶべき現象と言える。

審査結果の要旨

社会的カテゴリー化がステレオタイプの認知的基盤であることは広く認められている原理であるが、この両者の直接的な関係性についての実証的研究が稀薄である点に着目し、研究が展開される。当該研究テーマについての文献レビューを第一部とし、第二部では、情報処理特性論から捉えたステレオタイプの認知的研究として4つの実証研究が展開される。

具体的には、「事物の知覚原理を社会的認知に応用することの有用性と限界(実証研究)」、「カテゴリー属性情報と個別情報の競合(実証研究)」、「カテゴリー・アクセシビリティ要因の検討(実証研究)」、「社会的属性情報と非社会的属性情報の比較(実証研究)」として実験研究が積み重ねられた。そこでは、性別と発言内容の性度という2つのカテゴリー化基準を競合させる課題を中心として、対人記憶過程でのカテゴリー化効果(即ちその指標である強調化効果)が意味のある社会的属性のみに基づいて生起すること、ならびに特性(印象)判断におけるカテゴリー化効果がカテゴリーの属性要素によって規定されることを示した。ただし第二部の情報処理特性論の枠組みでは、刺激人物に対する特性判断の規定因が明示され得ず、社会的動機論の視点が導入される第三部が展開される。

第三部においては、社会的動機論から捉えたステレオタイプの認知的研究として3つの実証研究が行われる。具体的には、「ディスカッション視聴型課題における印象評定判断(実証研究)」、「ディスカッション参加型課題における印象評定判断(実証研究)」、「交差カテゴリー化状況下における対人記憶過程と印象評定判断(実証研究)」として実験研究が実施された。そこでは、「カテゴリー化仮説」(本研究においては、男性の被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定し、女性の被験者は自己を女性的にステレオタイプ化して評定する傾向)、「ステレオタイプ回避仮説」(男性の被験者は自己を女性的にステレオタイプ化して評定し、女性の被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定する傾向)、「社会的アイデンティティ仮説」(男性の被験者は自己を男性的にステレオタイプ化して評定し、女性の被験者も自己を男性的にステレオタイプ化して評定する傾向)という3つの対立仮説が、状況依存的にそれぞれ支持されることが実証され、これらの仮説が統合できることが示された。

加えて、複数のカテゴリーを与えることで、単一カテゴリーの効果を弱めること、たとえばある人物についての情報で、「男性 - 女性」というカテゴリーに、「学生 - 会社員」といった別のカテゴリーを追加すると、性別というカ

テゴリーの影響が弱められるといった、すなわち「交差カテゴリー化処理」によって強調化効果が弱められることを示すとともに、さらに、意見や評価が自分だけにとどまるのではなく、他者に対しても表明されるような「公的表明性」が高い条件下での特性判断過程において「創られた性ステレオタイプ」と呼ぶべき現象が生じていることを示した。

終章部では、まとめと今後の展望が述べられた。

本論文は、社会的カテゴリー化概念ならびに関連研究領域のこれまでの研究を踏まえた上での問題設定にもとづき、7つの実証研究が展開され、得られた結果は新しいコントリビューションを示し得ていると判断できる。願わくは、当該研究がどのような社会的な貢献をなし得るのかという点がより前面に出された記述が望ましいと考えられるが、この点は論文の価値そのものを減ずるものではなく、今後のさらなる研究展開において社会的な視座を有したパースペクティブを採用することによって研究の価値が高まり得ることを意味するものである。